

## 〔講演要旨〕 安政南海地震 (1854) による土佐国の死者分布

都司 嘉宣(東大地震研)・松岡祐也(東北大)

現在の高知県に相当する土佐国は、幕末には山内氏の高知藩ただ1つが全域を支配していて、県内には他藩領、あるいは旗本領などいっさい存在しなかった。このため、高知藩でまとめられた被害数字は、ただちに現在の高知県全域での被害数と理解することができる。この点、関東平野の各県、あるいは小藩の割拠した愛媛県とは大いに異なる。安政南海地震(嘉永七年十一月五日、1854-XII-24)による土佐国の死者総数は、藩主・山内豊信によって、集計され、地震津波発生から50日が経過した十二月二十六日に幕府に公式に提出された。それによると、土佐国全体での死者数は372人と記されている。この報告書には、「行方不明者」が別個の数字とはされていないので、行方不明者もこの死者数に合算されているものと考えられる。この数字は、地震発生から十分な時間が経過していることからほぼ最終の被害統計数字と考えられる。すなわち、この数字に洩れた死者はほぼないと考えられるのである。

いっぽう、「三災録」(武者、1951のp175)、「徳永達助記録」(「新収日本地震史料第5巻別巻5-2」のp2138)、「温故筆剩」(同p2083)などの史料には土佐国七郡と高知城下の地域別死者数が載せられている。「温故筆剩」に従うと、死者、行方不明者の合計数字は、安芸郡19人、香美郡20人、長岡郡3人、土佐郡10人、吾川郡5人、高岡郡96人、城下159人(死者106人、行方不明53人)である。「温故筆剩」では幡多郡の数字が欠けているが、前の二文献に「幡多郡の死者60人」とあるので、これに従うと、これら七郡と城下の死者・行方不明者を合計すると、ぴったり372人となって、上述の数字に一致する。すなわち、郡別、および高知城下死者数がこれでほぼ確定することになる(図1、図2)。

いっぽう、「三災録」はじめ各種の古記録から、土佐国の各集落での死者数を断片的に知ることができる。そこで例えば幡多郡を見ると、鈴で2人、入野で5人、中村で29人、愛宕町で1人、下田で数人(かりに5人とする)、清水で1人、古満目で3人、宿毛(近郷を含め)で12,3人(12人とする)であることが信頼するに足る各種の文献によって知ることができる。この数字を合計すると58人となって、幡多郡の合計数60人に極めて近い数字が現れる。「数人を5人と見なし

た」と「12,3人を12人と見なした」ことを考慮すれば、幡多郡の死者はこれでほぼ尽くされていることになろう。すなわち、これ以外の場所では死者はほぼないと考えられるのである。同様に安芸郡の死者数は19人であるが、現在の安芸市の中心市街地である旧・松田島村で17人の死者があった(「大変記」、上述「新収」p2187)ので、安芸郡の他の場所では、死者はわずか2名しかいなかったことになる。左図には、各郡別死者数と、各郡内の死者の生じた集落、そこでの死者数を記しておいた。香美郡は20人の死者のうち夜須、赤岡、久枝で12人の死者を生じており、どこで出た死者か不明なのは8人だけである。長岡郡、土佐郡、吾川郡の死者はどこでたかは不明である。高岡郡の死者の発生地点もほぼ解明し尽くされたと言っていいてあろう。

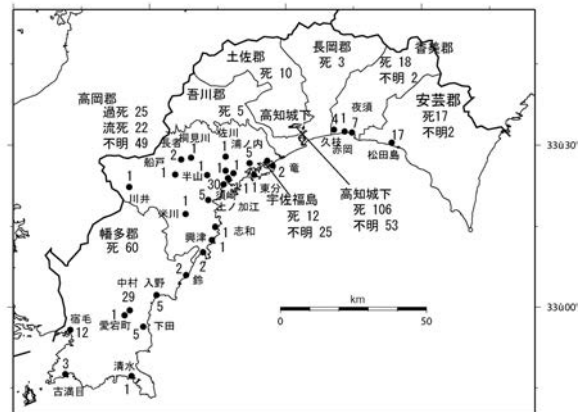


図1 安政南海地震(1854)による土佐国郡別、および集落別死者



図2 安政南海地震による高知城下の町別死者数 灰色曲線は火災範囲